

「自然と人間との共生」の考察

—芸術, 福祉, 看護, 教育の視点から関わりの創出—

寺田裕美子¹・飯田誠・西節子・宮崎康江・兼丸ひとみ²

要 旨

本研究の目的は、「自然と人間との共生」をテーマに関わりの創出について芸術、福祉、看護、教育の各専門の視点から考察したものである。自然と人間の多様さにアプローチすることで社会的交流が相互作用をもたらすよう、ワークショップを通して実践した。ワークショップには、社会交流への参加にあたって困難さを感じやすい知的障がいのある方々に参加を呼びかけ、その困難さに配慮し、本学学生と共に各専門的視点を統合したサポート方法を構成して臨んだ。これは、その実践報告及び考察である。

キーワード：社会交流、園芸療法、ワークショップ、花育、看護、人間教育

1. はじめに

2012年5月に公共公園内で開催された「フラワーペット」事業に企画参加することとなった。イベントテーマは、「自然と人間との共生」。テーマ性と公園という公共の空間で行われるイベントへの参加にあたって、本学では芸術・園芸療法・看護・教育の視点を持って、多様性のある自然と人間がより良い相互作用を生むよう関わりの創出についてワークショップを通して試みることにした。

イベントの会場である花博記念公園鶴見緑地は、平成2年(1990)に国際花と緑の博覧会が開催されその跡地126haを再整備された都市公園である。花と緑などの自然を満喫でき、スポーツやレクリエーションを楽しめる公園として広く利用されている。平成22年から「フラワーペット」イベント事業が開催され、花博から20周年となる今年で3回目の実施となる。花卉を使った花絵は、一般的にインフィオラータ(イタリア語：花を敷き詰める意味)と呼ばれ、イタリアでキリストの聖体の祝日を祝って道に花を撒いた習慣が、後に装飾的趣向が凝らされるようになりヨーロッパ全土に広まったとされている。花絵は芸術的な美しさを生み出すだけで

なく、参加者が共に作りあげることや、球根栽培のため破棄される花卉の利活用としての意味をもつものである。近年では世界中で市民参加イベントとして人気を誇っている。

2. ワークショップの経緯

芸術、園芸療法、看護、教育といった専門的サポートとはどのような役割を担うことができるのか、実践を通して考察することとした。

公共性の高い場でのイベントの参加については、あらゆる人々が対象となる。大勢の様々なひとが集まるイベントへの参加に困難さを抱えるものとして、今回、鶴見緑地に隣接する位置に施設をかまえる知的障がい者施設しろきた・みどり福祉作業所の利用者さんらに参加いただいた。本学からは各専門教員および、看護・初等教育学科の学生と園芸療法専攻した卒業生が参加した。芸術系のサポートとして芸術系大学卒で高齢者介護職に従事されている方にも参加いただいた。

【ワークショップの開催】

3月19日「イメージの共有と創出」

テーマ：「自然ってなんだろう？」

4月23日「協働への意欲、期待感の構築」

1. 大阪信愛女学院短期大学 客員教授
2. 大阪信愛女学院幼稚園 非常勤講師

テーマ：制作つづきと、交流

5月3日「フラワーカーペット」参加

テーマ：「創作の発揮」

5月7日まとめ

テーマ：「思い出シートづくり」

3. 「創作」の視点から

一障がい特性に配慮したイメージの表出と共有のサポートについて一

今回、フラワーカーペット制作の要請を引き受けるにあたり、教育的に意義深い形で取り組みたいと考えた。看護学科寺田の園芸療法士関連の科目「ガーデニング」では、しろきた・みどり福祉作業所の知的障がいのある方々を招き、本学の受講生がマンツーマンで彼らをサポートしながら共同で授業課題に取り組んでおり、その授業形態を活かすのが最善ではないかと考えた。

知的障がいのある方々を今回のフラワーカーペット作りにお誘いするにあたって大切にしなければならないと考えたことは、彼らが主体性を発揮できること、そして、作る喜びや達成感を得られるということである。そのためには、単に指示された作業をするというのではなく、彼らに最初から参加してもらい、主体的にイメージ作りをしてもらわないといけないと考えた。テーマとして「自然と人間との共生」が掲げられており、テーマに沿ったイメージ作りにあたっては個人制作が良いと考えた。イメージを紡ぎだすにはかなりの集中力が要し、まして彼らはそのような活動体験は少ないと思われる。なまじの共同作業はかえって集中力を阻害してしまうだろう。そして、持続できる集中力を考慮して、ワークショップは90分を限度とし、完成までに2回実施することにした。一人ひとりが取り組む作品が最終的には巨大なフラワーカーペットになるということで、彼らは大いに期待感を持ち、また適度な緊張感を持つであろう。

1) 1回目のワークショップ (3月19日)

新学期が始まっておらず、本学からは彼らとのコラボレーション経験のある今春の卒業生が参加し、しろきた・みどり福祉作業所からは11

名が参加した。他に本学教員、作業所スタッフ、ボランティアが立ち会った。作業所の方々は久々のワークショップであり、まずはペアを組む学生が各机に案内し、なごやかに雑談や自己紹介をしたりすることでリラックスを図った。そして、フラワーカーペット制作への取り組みについての説明に入った。「ゴールデンウィークの5月3日、大勢の人出でにぎわう花博記念公園で、チューリップの花びらで大きなフラワーカーペットを作ります。この教室よりも広い20m×5mという大きさです。」このような言葉掛けでゴールであるイベント当日の雰囲気をつかんでもらった。

それからワークショップの説明に移った。基本テーマとして「自然と人間との共生」が掲げられているが、これはとても抽象的で彼らがイメージとして持てるものではない。それで、「どんな生き物がいるかな?」「好きな生き物は何ですか?」と投げかけ答えてもらう中で具体的な動物や植物をイメージしてもらおうと考えた。また、超スローモーションで自然界の小動物の営みを撮ったビデオ映像を鑑賞した。ロケーションのすばらしさと超スローモーションにより自然環境や生き物が神秘感を持って迫り情動を高めてくれた。

それから個人制作に入ってしまったのだが、抽象的な思考が不得手な彼らが具体性な手がかかりをもって作業にあたれるよう留意した。

72cm×48cmのダンボール紙。その全面に幅広の両面テープを貼り、周囲に割り箸を額状に貼付ける。これが彼ら各人の作業する支持体となる。厚くて大きめのダンボール紙やわりばしでの額装は、自分のテリトリー感、手応え感を確かなものにするためである。

そして、イメージの手掛かりになるように、花や植物、鳥や虫、魚といった生き物、自然の風景などの参照資料やエイブルアートの参照資料を用意した。

まず、画面全面に貼られた両面テープをはがし粘着面を露出させる。そこに2.5ミリメートル径の尻糸で線画を描くように粘着面に置いていく。尻糸は長めに約2m用意し一筆書きのようにして適当な形をとっていく。あそび感覚で

気楽に何度でも試行錯誤ができるので、容易に作業に没頭できるだろうと考えた。そして、そうこうするうちに納得できる形に定着していった。

次に、イベント当日のチューリップの花びらを貼っていく作業の予行演習になるよう、和紙をチューリップ各色と同色で色染めしたものを花びらサイズに破いたものを用意。凧糸で区切られた形の中に思い思いの色染め和紙を貼っていく。彼らにとって妥当な約50分で作業を終了。一人ずつ、学生サポーターの支援を受けながら自己作品を紹介しながら分かち合いを行う。「はるかなる山の風景」「うお座の魚」「海の中」といったタイトルも披露しあった。

客観的には未完成に見える作品も多かったが、彼らの中には一区切りついたという満足感があり、イベント当日への期待感も広がったようである。

さて、次の段階として個々のイメージを自然とひとの共生というテーマの20m×5mのフラワーカーペットにいかにか展開するか、原画を構想しなければならない。作業所の11名の方々の作品は極力、変えたり省いたりしないという基本方針の上で我々スタッフと参加学生との話し合いで煮詰めていった。いくつか出た案を基に最終的に飯田がまとめ、フラワーカーペット原画に仕上げた。



写真1 制作風景 凧糸で描く



写真2 和紙で色付け



写真3 出来上がりの発表



写真4 出来上がった各作品

2) 2回目ワークショップ (4月23日)

新学期が始まっており、教科「ガーデニング」の新規受講者の有志がサポーターを務めた。最初に着色も施した原画を披露する。11名それぞれの作品が取り込まれているを確認し驚きと喜びの声が上がった。モチベーションが高まっ

たところでマンツーマン態勢での作業継続に入った。徒に手を加えることよりも、表出された自分のイメージを喜びと満足感をもってゆっくり味わう時間とした。原画のタイトルは「いきものいろいろ!」とした。



写真5 デザイン原画

3) フラワーカーペット制作 (5月3日)

作業所の方々及び信愛関係者合わせて約40名が参加。他に地域の方々約30名も参加。午前中は朱赤、桃、黄、紫、白の色鮮やかなチューリップの大量の花弁の山を前に花びらをもいでいくという作業であった。しっとりした色鮮やかな花びらをむしっていく作業は視覚的にも触覚的にも心地よいものであった。和気あいあいと楽しく作業は展開した。その後、野外に用意された20m×5mの原画下絵に各色のチューリップの花びらを皆で敷き詰めていき30分程で完成させた。大勢の人々と共に自分たちの作品を基にした原画をフラワーカーペットに仕立てていく。多くの人々と共にまた支援も受けながら自分の作品が目の前に色鮮やかなフラワーカーペットとして実現する。知的障がいのある方々はこのような一連のプロセスの中で作る喜び、主体性、達成感を得られるのではないだろうか。



写真6 フラワーカーペット制作風景

写真7 フラワーカーペット完成



4. 「園芸療法」の視点から

4-1 園芸療法の位置づけ

近年、園芸療法や音楽療法は、補完代替療法として位置づけられている。

現代医療の分野では、細分化された専門研究において分子や遺伝子レベルでの治療や精神科においても脳科学からアプローチする治療と実践が始まりつつある。根本的な生物の生命に関わる治療がこの先邁進していくだろう。環境分野では、資本主義の自由な生産から、自然エネルギーを活用した社会システムや資源活用が行われさらに強化されていく必要があるのだろう。現代人の心の病をあげた時、認知症、うつ、ひきこもり、発達障がいなど、その原因やメカニズムの解明が急速に進み脳機能へのダイレクトな治療方法と、補完代替療法と呼ばれる非薬物療法が取りだたされている。疾患や障がいの二次的な病的症状に対して生活リズムを整え、気持ちの安定や気分・行動障がいなどを軽減するアプローチによって“より良く生きる”ことへのニーズが求められてきたことがその背景にある。

4-2 園芸療法の特性

園芸療法士の視点からどのような関わりの創出をサポートすることが可能なのか?園芸療法プログラムを行う際の準備方法を通して考察する。

療法のツールとして自然や植物の育ちを利用する。自然の外界刺激が生物に与える影響は大きい。睡眠リズムを調整したり、活性化、知覚機能などの他、脳すなわち心への影響も大き

い。自然、植物と人の関わりを軸に人のニーズを明確にし、その目的と方向性を定める。環境という場を共有しながら、相互作用を促し、良き経験の実感へと導く。

プログラムを行う際には、ニーズの把握、環境設定、プログラム計画、人的対応を構成して準備する。

1) ニーズの把握

ニーズの把握時に、疾患や障がいがある活動中の安全確保や健康状況の悪化に対しどのように予測し予防可能であるか検討が必要である。特に屋外での活動に際しては、転倒、熱中症、アレルギー、植物の毒性、異食に関して予防策など注意が必要である。

また、参加者の運動機能、知覚機能など活動により刺激を促したい機能がどのような状況にあるのか、的外れなサポートとならぬよう把握して捉える。活動内容として、一鉢の植物の手入から、庭や花壇、公園の管理作業、また農作物の栽培や植物クラフトといった創作時にどのような困難が生じるのか捉え予測と準備する。

本人が主体的に活動できるよう、農園芸作業の中でどのようなことができるのか、どのように工夫すると可能となるのか把握しておくことは、できる・わかる・したい気持ちを引き出し主体性を引き出すアプローチへつながる。

2) 環境設定

良き場の設定には、良き自然を五感で享受しやすい場の判断と整備、さらには自然との関わりを生み出すデザインが必要であり、人との相互の影響も環境要因として捉えていく。自然との良き経験には、心身の活性や安心感からの鎮静、開放感といった実感を伴う。特に園芸療法では、積極的に関わることによる活性から鎮静へ向かう変化が起こり、同様に環境からアプローチする森林療法では開放感や鎮静から次なる活性化へ向かうプロセスが特徴付けられるだろう。

人の良き影響としては、受け入れられ受け入れるという信頼の関係がベースにありサポート人員の理解と対応の共有が不可欠である。

自然を享受しやすい場とは、介入のしやすさ、

安心安全感、程よい刺激の享受があり、生きやすさ、生の自然との接合点に相互が調和する要素が生まれる。

これら環境の特性把握と人への良き影響について知り、ニーズに配慮して準備し提供できることが必要である。

3) プログラム計画—成功体験の構築

植物の育ちを楽しむには、育ちの結果が良好であることも大事である。誰でも実感しやすい成功体験へ導けるよう、道具や工程を工夫し明確に伝えることにある。栽培容易な品種の選択や、認知しやすさや取扱いやすい形状に特製ある頑丈な種を選出することも工夫のひとつである。育ちへの施しに対して良く反応する夏野菜にナスがある。ナスは日差しと水と肥料をせせと忠実に施してやると育ちや実りに大きく反応しわかりやすい。作業や植物の特性を見極め、対象者の認知に合わせた実感と成功へ導く。

植物の育ちに沿い生物のもつ時間の流れ、朝夕繰り返す時間、毎年めぐる季節、過ぎ去っていく年月が、繰り返し記憶を固定し、未来への期待感、回想など経験が自らの生きる時間と積み重なり情感の豊かさへとつながっていく。生物には環境をキャッチしながら動くという性質がある。ひとが環境に直接触れ感じたいという根源的な生きる欲求につながっている。自分自身でつかむ実感と他を通じて感じる情感。納得するまで時間をかけて刻まれた記憶は、長期に保持され老年期などの心の充実へつながる。



写真 8 誠実な世話に良く反応するナス

4) 人の相互作用

人と人との相互の関係もまた、心身のエネルギーを活性化させる。生物は他の生物の動きに如実にキャッチし、対応しようとする感覚が刺激される。動き態度、声、言葉の意味、協働から得る刺激は身体全体で感知される。人の動きやそこで発せられる言葉、態度は環境刺激として知覚認知される。良き心への導きには良き人と人との関係が重要である。

人的配慮無に、良き環境をサポートすることは困難である。参加者同士が目的や役割を共有し、協働を通じた共感に導けるように良き関係に配慮する。屋外において大きな自然の中での協働には、その規模に人間一人では太刀打ちできない敗北感が自然な協力や共感を生みやすい。心身の状況を配慮しながら、見極め調整する人材が必要となる。環境が人に与えている影響をうまく活用しながら屋外での過ごし方をサポートすることも園芸療法士の役割である。

4-3 ワークショップの開催

しろきた・みどり福祉作業所では、日中活動に就労を軸とした下請け作業を実施されている。芸術やアート活動には特に取り組んでいない状況にあった。施設の参加者 11 名が地域のイベントに参加するにあたりどのようなニーズが発生するのか、毎年、大学での園芸療法実習で 4 年にわたって参加者の園芸作業に関する個別のニーズを把握してきた。知的障がいがある方々の特徴として、コミュニケーション、情報の享受方法、抽象的概念の理解、判断・予測、気持ちの訴えの乏しさなどに個性と困難さが伴う。また、発達障がいのある方々の特徴として、こだわりが強く、しばしば時間の感覚の理解、気持ちの表出、共感に困難さを伴うことがある。一方、実感を伴い、繰り返し経験のある物事に関しては、集中力や根気強さを抜群に発揮できる点や、人との交流に関して馴染みある人との交流の場面で人懐っこさや実直な心のベクトルが穏やかな雰囲気を生み出してくれ交流が良き関係へ導いてくれる。単発的なイベントの特徴として、インパクトの強さと瞬発的な体感や偶発的な人との出会いに楽しさを感じさせる性質がある。こういった人間特性とイベントの特性に対して

いくつか配慮する点をあげる。

- ① 機会の創出
- ② 人的サポート体制
- ③ サポートの適正人材、情報共有
- ④ 作業時間の固定
- ⑤ 特性を捉えたアプローチ
- ⑥ テーマ意味の共有
- ⑦ 主体的な実感と経験の構築
- ⑧ 作業の巧緻性に配慮した表現の工夫
- ⑨ 気持ちを言葉にする経験の構築
- ⑩ 馴染みある人との交流の反復

また、視覚的情報が優位される特性や、シンプルな言葉の交流に努め、作業工程も繰り返しや手順が視覚的に明らかであるよう配慮した。イベントの前に 2 回、終了後に 1 回のワークショップを実施することで、障がい特性への配慮と、さらに個別のニーズに対応できるよう学生との創作時間を交えた。

今回は、イベントと特性上、植物の育ちに関して実感あるアプローチはできなかったが、チューリップという馴染みある植物への関心と経験は深まった。

ワークショップ内の人的サポートとしては、安心感ある距離から細やかな声掛けや創作サポートにより、行動への誘導と見守りにより主体的な実感が得られるよう配慮した。それぞれがイメージした創作について、言葉を発して共有したり、言葉で書き表現したり、他の人と思いを共有する機会を交えた。



写真 9 イメージの共有

園芸療法士は視点を病院や施設内から脱し、

地域や社会的ニーズを捉え、実直に投げかけ専門性を活かしたさらなる一步を踏み出したい。ひとと植物の関係は多様な視点を生み出すことができる分野である。

自然の大きな川の水は淡々と流れ去る。一つ一つの田畑へ必要な水を導く時、新たな水路を設けるのか、雨の恵みを待つのか人々の知恵や工夫が必要である。

5. 看護の視点

—ケアにおける自然や人との関わりの意味について—

ナイチンゲールは看護の定義として「看護がなすべきこと、それは自然が働きかけるに最も良い状態に患者をおくことである。」と述べている¹⁾。看護は、自然の回復過程が順調に進むように、又は自然の回復過程を妨害しないように、その働きを助けることが役割なのである。しかもその援助の内容は、単に薬を飲ませたり、医療処置をしたりという医療介助にあるのではなく、その人の生活の在り方を見つめて、人的な環境をも含む環境が、最良の状態にあるように整えることが看護であると示唆している。看護の働きが、自然の回復過程の姿と結び付き、その時々々の生命力に力を貸すことが看護であると言われれば、そうであるが、どういうことであるのか。さらに具体的にイメージ化できるように、もう1点ナイチンゲールは、「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること」と述べている。こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えることを意味すべきである。その時々々の生命現象の質は、必ずその生命体を取り巻く環境の在り方に左右されながら、一定の方向を目指しているものだと理解できる。つまり、その人の日常生活上のこまごまとしたそのありようが、その時々々のその人の生命力の在り方と幅を決定しているのだから、その生活のありようを、生命力の消耗を最小にするように整えることで、その生命力に力を貸すことが看護であるということである。



写真 10 庭の草花でアレンジメント

“自然との共生へのアプローチ
土と 水と 光と 風
呼びさます
そだつ緑の 静かな命が
病や老いの身に
忘れかけていた 生きる力と
あきらめていた 生きる喜び ”

本学の園芸療法・ガーデニングの科目履修生の卒業生で看護職、介護職を生業としている人が全体の約半数を占める。その人たちの活動を列挙する。

- ・特別養護老人ホームでのデイサービスにおいてガーデニング作業
- ・フラワーアレンジメント
- ・庭のメンテナンス各種講演会の主催
- ・本学の公開講座においてフラワーアレンジメント指導
- ・各種関連学会出席
- ・老人保健施設においてプランターボックスの作成
- ・庭のメンテナンス
- ・精神科病院病棟に勤務しながら病院の庭の管理メンテナンスを委託されている。

これらの活動は、その施設の入院患者や入所利用者、デイケア利用者を介して行われる。始めのうちは、『さて何が始まったのかな?』と遠巻きに珍しそうに見ていたお年寄りが、回を重ね

るごとに興味を示し始め、挨拶をしてくれ、もっと慣れてくると、お茶を出してくれたりする。若いころに、農業の経験がある利用者は、作業日には、リーダーシップを発揮、花と、雑草を見分けたりして得意になる。老健施設の裏の畑で収穫したサツマイモで焼き芋をしてみんなで食べたり、トマトやキュウリのサラダなど皆の顔がほころび、寡黙勝ちに施設内をうろうろしていたお年寄りが満面の笑顔を見せてくれた時、看護師としても園芸療法士としても心から喜びを感じる。

今回のイベントでは主に知的障がいのある方々との共同作業であった。始めに「生き物って何？」から始まって、絵の作成からフラワーカーペット作成まで、終始にこやかに、元気に、参加されたみんなが刺激し合いながら作業を終えた。チューリップの花弁の1枚1枚をきちんと隅々まで几帳面に並べる人、自分の書いた絵の部分を見つけて飛び上がって喜ぶ人自分の絵の部分だけに花弁を置く人など、言動は人それぞれであったが、個性にあふれた、イベントへの参加に形であり、参加した皆が活気にあふれていたことは、チューリップの球根をよりよく育つようにと、摘み取られたチューリップの花や花弁を利用しフラワーカーペットで花の命が再燃し、その命が知的障がいの方たちの笑顔に貢献している。小さなことであるが、自然と共にあることを感じるのである。

5-1 今後の展開

『一粒の種を植え、育てる。植物のある穏やかな環境に身を任せる。植物と共に過ごす1日が、人の生活のリズムを取り戻し、暮らしに必要な心身の働きを呼び戻す。

植物そのものや植物が育つ環境から私たちが受ける刺激や、植物に関連する様々な活動を、精神機能や感覚運動機能の維持・回復、生活の質の向上に用いるリハビリテーション技法の1つに当たる。』と山根は述べている²⁾。

ならば、医療職である看護師は、植物の育つ環境のどの部分が、精神機能のどの部分に影響しているのか？人間の持つ五感、いや六感の何に影響しているのかといったエビデンスに基づ

いた考えや、理論に基づいた関わりが今後の課題だと考える。まさに冒頭で述べたナイチンゲールの看護論に述べている清潔な空気・陽光・暖かさが生命力の消耗を最小にするようにととのえることと共通するのである。

6. 「信愛教育」の視点から

今回のワークショップの初期段階から完成までの作業のプロセスを通してみられた障がいのある方と学生たちの関わり方について考察したい。

まず、障がいのある方々と学生たちがペアを組んで、自然界の中にみられる植物や生き物についてのイメージ作りから始めた。学生たちのサポートを受けながら、障がいのある方々が主体的にイメージを形に表わし、どのようなチューリップの花びらを用いて色彩をつけたらよいかを考えることで作品づくりをしたが、ペアを組んだ者は互いに初対面である上、言語による理解が困難な知的障がいのある方々と共に行なう作業は、意思疎通がうまくできず、多くの戸惑いがあったように思われる。学生たちは、いろいろと工夫をこらしながら相手が納得いくまで時間をかけてやさしく説明するなど、随分苦労したようである。しかし、そうした人間のかかわりの中で、互いの間に目に見えない心と心の通い合いができ、一つの課題をこなしていくことができた。

障がいのある方々と学生たちが同じ目線に立ち、一つの目的に向かって協働作業を行なうとき、あせらず忍耐強く、ゆっくり時間をかけて行なうこと、待つことの大切さを学生たちは学んだようである。また、理屈ではなく、個々人が持っている感性を引き出すテクニックを考えていく中で、互いの心が触れ合い、言葉にはならない喜びが湧いてきたのではないだろうか。日頃、社会との触れ合いの少ない生活をしておられる障がいのある方々にとって、学生たちとのあたたかい人格的交わりができたことは、大きな喜びをもたらし、新しいことへの挑戦により、自分なりに自信をつけることができたのではないだろうか。また、学生たちも彼らの純粋無垢な心に感動し、思いやりの心が育っていつ

たことだろう。こうして、このワークショップを通して双方に大きな恵みをもたらされものと確信する。

現代社会において人間はとかく自己本位的になり、他者に対する関心が薄く、打算的な生き方になってきているようである。また、効率や利潤を原則として考えるのに慣れてきた世の中にあっては、うっかりすると弱者への思いやりが薄れていくのではないだろうか。聖書に「受けるよりは、与える方が幸い」（使徒言行録 20. 35）という言葉があるが、自分の周囲の人びとを“大切に”思い、あたたかい心で奉仕していくとき、自分も幸せを感じるのである。世の中で弱い立場に置かれている方々のために、「今」という時間に愛をこめて生きることができたら、その人の幸せは、より大きなものになるのではないだろうか。ところで、人間はペルソナ的存在である。Persona とは、per という前置詞と sonare という動詞からできている。Per は～のために、sonare は奏でる、鳴る、響かせるという意味である。従って、ペルソナとは、「自分を通して共鳴する存在」「共鳴しあえてはじめて人間となる存在」といえる。この点からみても、今回のワークショップを通して彼らは、人間として大きく成長することができたのではないかと思う。

作業の最終段階においては、大勢のボランティアの方々と心の響き合いで美しい花のカーペットを完成させることができたが、それは単なるチューリップの花びらで描かれたカーペットではなく、製作者の愛の心が織り込まれたカーペットで、見る人の心に感動をもたらしたのではないだろうか。日頃、学院内で「信じ合う、愛し合う心をみんなの中に」という精神で学業に励んでいる学生たちは、この言葉が単なる観念的なことばとして意識されるのではなく、体験を通して得た生きたことばとして身についたのではないだろうか。

7. 花育の視点から

～幼児・児童の情緒面の成長、世代間交流について～

幼児にとって花、葉っぱなどの認知について、

地域や環境によるものが大きく、普段の遊びの中で、身近に見たり、触れたりする機会が多ければ、おのずと興味がわき、また実際に植物に触れる機会が少なくても、絵本、映像で知る機会が与えられれば、現物ほど鮮明ではないが、知識として身につけている。

今回のイベントに使われたチューリップはまさに、子供たちにとっては、もっともポピュラーな存在で、乳児向けの絵本には、お花として一番最初に出てくるのが、丸の上の部分の部分が三つギザギザになった形に、茎が下に伸び大きな葉が両方についているイラストである。また、童謡の初めに出てくる曲には、♪さいたー、さいたーで始まるチューリップの歌がある。お花と言えば皆がそれをイメージする位、幼いころより、認知しているにもかかわらず、実際に咲いているのを見るのは、お花屋さんの切り花や遊園地や公園のびっしりと花壇を埋め尽くされたもので、実際に一輪の花を手にとったり、球根から育てたものに触れる機会が、あまりないことを残念に思う。球根から育ち、芽が出て、花芽が出て、開花する。そのプロセスを是非幼少期に本物に触れる体験が、花育の大きな役割だと感じる。

フラワーカーペットの材料である花びらが、どういうプロセスでできあがるのか？実際に秋から育てる経験を積んだ後に今回のイベントにも参加すると仮定すれば、事前に何度かのワークショップを開き、自分たちの育てた物で、花もぎを経験させ、手で作業し、目で色を感じ、香りや触れた感触など五感を十分に使うことで、本来の花育の意義があると考ええる。また、イベントのボランティアの一員としての役割を考えると、年長児以上の親子対象にすると集中力や効果も期待できる。また親子参加という安心感から、他の参加者とも同じ目的を持った仲間同士ということで、老若男女の壁を越えてコミュニケーションが気軽に取れる。また、一つの作品が出来上がったときには、達成感、連帯感が生まれるものである。ぜひ、次の機会には、幼児、児童の親子参加で、その感動を味わっていただきたいと考える。

8. 終わりに

自然の多様さ，人間の多様さは，動きを生み出す．多様な動きは関係性が生まれ役割を創出する．

「いきものいろいろ」というタイトルは参加作品の一つの題名を取り上げた．

「自然と人間の多様性」には，生命がこれまでどの様にも生きてきたという確かさに驚き，これからの可能性と未来への期待感が高まるのである．

春は生き物を活発にさせてくれる季節である．何かを始めるのにみんなで共有しやすく動きある活動をしやすい．そんなことも今回の取り組みを後押ししてくれたように感じる．

謝辞

しろきた・みどり福祉作業所の皆さんはじめ，今回ワークショップに関わっていただいたすべての方々にそれぞれの役割に楽しさや喜びを共感し，わかちあえたことに感謝しお礼を申し上げます．

引用文献

- 1) 金井一薫著；ナイチンゲール看護論・入門，現代社，(2003)
- 2) 山根寛ほか著；園芸リハビリテーション，医歯薬出版株式会社，(2004)

参考文献

- 1) エドワード・S・リード；アフォーダンスの心理学，新曜社，(2011)
- 2) J. J. ギブソン；生態学的知覚システム 感性をとらえなおす，(財) 東京大学出版会，(2011)
- 3) 大井玄 編ほか；森林医学Ⅱ－環境と人間の健康科学－，朝倉書店，(2009)
- 4) 山根寛・澤田みどり著；ひとと植物・環境療法として園芸を使う，青海社，(2009)

参考資料

- 1) Louie Schwartzberg ;The hidden beauty of pollination The beauty of pollination, (2011)
(受理 平成 24 年 6 月 30 日)